2016年9月1日

司祭のてがみ

No.109

カトリック行橋小教区 ： 主任司祭 ベリオン・ルイ神父

子どもたちが主イエス・キリストへの信仰に目覚めることができるために

●8月21日の主日の感謝の祭儀の間に幼児洗礼式が行われました。

●9月から教会学校の子どもたちは2学期を迎えています。―その二つのことを背景にして、皆さんと分かち合いたい思いが一つあります。

＊覚えていらっしゃる方がまだおられると思います。― 50数年前までは、幼児洗礼式は「ミサ以外の時」に行われていました。代父母に抱かれて 家族の見守る中、生まれたばかりの赤ん坊は聖堂の玄関の近くで洗礼を受けていました。―「神の民の一員となった」と言われていたその子どもは、実は民の不在のうちに洗礼を受けていました。代父母と家族の方はある程度まで「神の民」を象徴的に表していましたが、ほとんどの場合はその「民」の幼児洗礼に対する関心が非常に薄いものでした。―その情勢を改める必要があると判断した第2バチカン公会議は（1962 年～1965 年）幼児洗礼の「儀式」を改正し、できるかぎり、主日の感謝の祭儀の間、「神の民」 〝イエスの共同体〟 が集う中 祭壇の前で幼児洗礼を行うようにと指導しました。

＊その改正はどんな考えのもとでおこなわれたのか。その目的は何だったのでしょうか。―それは両親も「神の民」 〝イエスの共同体〟 も子どもの信仰への目覚めに対する責任と役割をもっと自覚するためでした。―成人の洗礼と違って信仰を自分のものとして表明することができない幼児の洗礼は、親と共同体の信仰と責任を前提としています。そのため、今の幼児洗礼「式」では子どもを信仰へ導く上での親の使命と 親が果たすべき責任は明白に表されています。 同時に子どもを「神の民」 〝イエスの共同体〟 の中で受け入れるに当たっての 全信徒の役割と責任も明白に表されています。

＝現在の幼児洗礼「式」の中にこのような教会の考え方（信仰）が精密に反映されています。

●子どもをその幼い時から信仰へ導くことは、親と共同体の務めです。子どもがすべての人に対する神の愛を知るように、そして特に物と心、両面における必要について心を配るものとなるように 親と共同体は教育する責任と使命を帯びています。

＊ところが洗礼の秘跡によって子どもの心の中に植えられた種が生え出て、実を結ぶために、どのようにして親も共同体も責任を果たせば良いのでしょうか。

＝結論から言えば、問われているのは親の信じ方と生き方、そして共同体の有り方と「雰囲気」です。

●言うまでもありませんが 子どもに「信じさせる」ことはできません。子どもがイエス・キリストへの信仰に目覚めるために、それなりの環境を整えることしかできません。・家庭においても、共同体においても。―

〒824-0006 行橋市門樋町８－５／TEL.0930-22-0805／FAX.22-0816／http://www.yukuhasi.catholic.ne.jp

＊「たとえ」をもって言えば、私たちにとって信仰は「鍍金(めっき)」のようなものではなく、人生を潤す「泉」です。信じることは「型にはまった」ことを守るのではなく、「道を歩む」ことです。イエス・キリストを信じることは、宗教的な色に染まっただけで過ごすことを意味しているのではありません。イエス・キリストを信じることは、イエスを模範にして、イエスに倣って、「神の子」に相応しく生きるように心がけることを意味しています。

＝幼児の洗礼を求めた親、それに応じた教会共同体は、子どもがイエス・キリストへの信仰に目覚め、福音を人生の礎(いしずえ)にすることができるために、どこに力を入れるべきかを考えずにはおられません。

●親として次のように自分に問いかけることを怠ってはならないと思います。―どうして自分がイエス・キリストを信じ、教会共同体と関わろうとしているか。―どうして人間として生きるために自分にとってそれが必要で、大切なことなのか。それに答えるように心がけなければ、子どもの疑問にも答えることができません。―選ぶ必要があるときに親としてどこに判断の基準を置き、何を優先しているか。たとえ親が最もらしい理屈をつけて自分をごまかそうとしても、子どもの目と勘をごまかすことは、それほど容易なことではありません。「うちはカトリックだ」と言いながら、まず家庭の中で日常生活において、信仰が考え方や生き方に反映されず、教会へほとんど足を運ばなければ、どうして―その面において―子どもは親に信頼を寄せることができるでしょうか。

＝親はイエス・キリストと福音を信じる意味、価値、喜び、誇りを 身をもって証しするように心がけなければ、子どもには自分の力だけでそれに至ることは困難なことです。

●しかし子どもをイエス・キリストへの信仰に導く責任は親にだけ委(ゆだ)ねられているのではありません。―洗礼「式」が表しているように「神の民」〝イエスの共同体〟の役割も責任も大きいものです。イエス・キリストへの信仰に子どもを導くことが「神の民」〝イエスの共同体〟の重大な使命です。〝共同体〟が口で宣言していることを実行せず、偽善、矛盾、つまずきの場になれば、委ねられた使命を果たすどころか、妨げ、下手をすれば一生の妨(さまた)げになってしまいます。―だから私たち一人ひとりは、行橋、豊津の共同体がイエスに相応しい共同体となるために努力を緩めないように気を付けましょう。

＊しかしたとえ人生を送るに当たって、イエスが最高の道であると信じて 子どももその道を選ぶことを望み、そのために親も共同体もベストを尽くしたとしても、大人になるにつれて子どもは同じように判断するとは限りません。イエス・キリストを信じるか信じていないか、その選択は一人ひとりの自由に委ねられています。その自由を尊重しながら、親として共同体として一層忠実にイエス・キリストへの信仰に生きるように励み続けることは、何より大切なことだと思います。いつか「復活の光」が子どもの心に射し込むことを信じて。